

聖書:列王記第二12章17~21節、歴代誌第二24章17~22節

説教:主から離れる時

はじめに

いつものようにこれまでのあらすじを簡単に振り返ってから今日の箇所を見ていきます。今からおよそ二千八百年前、南王国ユダの六代目の王であったアハズヤがエフーの手によって倒れると、その母アタルヤが代わって女王の座に着き、ただちにエフーへの復讐を企てます。エフーは、ダビデの子孫から救い主が生まれるという主の約束を信じています。それを台無しにしよう。それでどうしたか。ダビデの血を引いている自分の孫を全員皆殺しにしようと考えた。そんな恐ろしいことが行われた日、祭司エホヤダとその妻は、当時まだ一歳のヨアシュを主の宮にかくまい助け出す。それから六年経ち、アタルヤは倒され、人々はヨアシュを新しい王として喜んで迎えました。やがて成人したヨアシュは神殿を修復しようと考え、そこでモーセの律法を語ると、人々は喜んで神殿修復のために献げていった。それが前回までのあらすじです。

これだけ見ればヨアシュはすばらしい王だったという評価になるでしょう。ところが今日の所を読むと、ヨアシュは家来たちの手にかかって殺されてしまいます。一体そこで何が起きていたのか。並行箇所である列王記第二と一緒に見ながら、神のみこころを求めてまいります。

1 ヨアシュ

1) アラムの王ハザエル

17節を読みます。「そのとき、アラムの王ハザエルが上って来てガテを攻め、これを取った。さらに、ハザエルはエルサレムを目指して攻め上った。」

ここでいきなりハザエルの名前が出て来ましたが、実はハザエルがアラムの王となることについては、預言者エリシャが関わっていました。ハザエルが他の用事でエリシャのところ訪ねていった時のことです。エリシャはハザエルに、「あなたがアラムの王になる」と語り、あなたはやがてイスラエルに襲いかかるであろうと、涙を流しながら預言します。ハザエルがユダ王国に攻め入ってきたのは、主の計画だったというのです。そうすると疑問が湧く。なぜ神はこのようなことをするのか。そのことはまた後で考えます。

2) 主の宮の宝物を送った

ハザエルは北王国を荒らし、ついには南王国にまで攻め入って来ます。ハザエルは強くてとてもかなう相手ではない。それでヨアシュはどうしたか。18節にあるとおりです。主の宮と王宮の宝物倉にあったすべての金を取って、ハザエルに送った。そうしたらハザエルは満足して引き上げていった。早い話がお金で解決したわけです。これをどう評価するか。王としては「耐え難きを耐え」というような屈辱的な決断ではあったが、国を守ることができたのだから、ヨアシュはよくやったほうだろう。おそらくそんな評価がされるでしょう。

3) 謀反によって倒れる

ところがどうなったか、20節。「ヨアシュの家来たちは立ち上がって謀反を起こし、シラに下って行くヨアシュをベテ・ミロで打ち殺した。」

よほどの理由がなければ、家来が謀反を起こすことはありません。どうしてこんなことになったのでしょうか。このあたりのいきさつについては、並行箇所の歴代誌第二24章に詳しく載っています。

2 祭司エホヤダの子ゼカリヤ

1) 主の宮を捨てた

歴代誌第二24章18節。「彼らは父祖の神、主の宮を捨て、アシェラと偶像に仕えた。彼らのこの罪過のゆえに、御怒りがユダとエルサレムの上に下った。」

前回のところには、人々は喜んで主に献げ、忠実に働いて神殿を修理していく様子見てきました。ところが一転して彼らは主を捨てていったとある。どうしてこんなことになったのでしょうか。

2) 祭司エホヤダの死

そこでヨアシュの人生を振り返ってみます。考えてみるとヨアシュが通ってきた道は尋常ではありません。一歳の時に父アハズヤが戦いで倒れ、祖母の手で殺されそうになったばかりでなく、実の母の手から離れて主の宮に隠れなければならなくなる。外に出たら見つかって殺されるので、主の宮から出られません。遊び友だちはおそらくいなかった。そうやって小学生一年生になったとき、やっと外に出られるようになった。そうしたらいきなりあなたはユダ王国の王様だと言われる。エホヤ

ダが親の代わりとなり、王の助言者としてひかえています。小さなヨアシュが政治のことはできないので、エホヤダが全部やってしまう。そうしたらどうなるでしょう。ヨアシュに自立心が芽生えてくると、エホヤダがうっとうしくなってくる。けれども政治のことはエホヤダがいないと決められない。ヨアシュの心は非常に複雑なものとなっていきました。

3) 罪の深みへ

そのエホヤダが死んだ時、ヨアシュは自由になると心密かに喜んででしょう。そのときです。17節で「エホヤダの死後、ユダの首長たちが来て、王を伏し拝んだ」とあります。ようは、王のご機嫌をくすぐりながら、自分たちの思い通りにしていこう。そういう魂胆で近づいたということですよ。世間知らずのヨアシュにはそれが見抜けません。易々とおだてのせられ、とうとう父祖の神、主の宮を捨てて、偶像を拜むようになってしまいます。アラムの王が攻めてきた時、すでにそのような状態でしたから、主の宮に納められていた宝、それも先代の王たちが主のために聖別したささげ物を簡単に敵の手に渡してしまう。主のために聖別したものを異邦人の手に渡すことがどれほど重大なことかなにも痛みを感じない。罪の深みに進んでいきます。

4) 神の警告

神はどうされたか。何人かの預言者を送って警告もしました。その一人が祭司エホヤダの子ゼカリヤです。彼はこう言った。20節。「神はこう仰せられる。『あなたがたは、なぜ主の命令を破り、繁栄を逃がすのか。』あなたがたが主を捨てたので、主もあなたがたを捨てられた。」

ゼカリヤは預言者として、主のみことばを真っ直ぐに語り、罪を罪としてはっきりと指摘します。ところがヨアシュはこのゼカリヤを憎み、主の宮で殺してしまう。そこには自分を育ててくれたエホヤダに対する、複雑でどろどろした感情が深く絡んでいると思われまます。

ここで問題が起きます。人々は、ヨアシュのことをじっと見えています。エホヤダがヨアシュを支えていた時は問題はなかった。ところがエホヤダ亡き後、ヨアシュは主を捨てエホヤダへの恩を仇で返してだんだん高慢になっていきます。信仰を捨て、人の道を踏み外していく者にこれ以上望みをかけることはできない。そう考えた家来たちは、ヨアシュに背き殺してしまう。

3 イエス

1) 正しい人の血を流す

ここに出てくるゼカリヤについて、イエスが触れています。マタイの福音書23章35,36節です。「義人アベルの血から、神殿と祭壇の間でおまえたちが殺した、バラキヤの子ゼカリヤの血まで、地上で流される正しい人の血が、すべておまえたちに降りかかるようになるためだ。まことに、おまえたちに言う。これらの報いはすべて、この時代の上に降りかかる。」

新約聖書では「ゼカリヤ」と発音していますが、このゼカリヤのことです。アベルが主にすばらしいささげ物をしたとき、それを見て嫉妬した兄のカインに殺されてしまう。アベルも、そしていま見てきたとおりゼカリヤ（ゼカリヤ）も主の前に正しいことを行い、また語ったのに、理不尽な理由で殺されてしまいます。

2) 理不尽な苦しみに満ちた世界

考えてみれば、私たちが生きている世界は理不尽なことだらけで、そこで私たちは苦しんでいます。たとえば、自分や愛する家族が重い病気にかかってしまったというとき、すぐに思うのはこのことです。なぜ自分が、家族がこのような苦しみにあわなければならないのか。事故で突然亡くなったと聞くと、だれもが問わずにはいられない。主よ、なぜですか。理不尽としか思えないからです。

世の人たちは言います。もし神がおられるのなら、なぜ神は黙っているのか。私たちが苦しみにあわないようにと神は動くべきではないのか。そんな疑問をぶつけられます。

3) 主の救いの計画

この問題は二つの視点に分けて考えなければなりません。神と人。この二つです。まず人の側から。人が抱える根本の問題は何か。「あなたがたが主を捨てたので、主もあなたがたを捨てられた。」ヨアシュが祭司エホヤダの恩に報いることなく、その子を虐殺してしたのも、またヨアシュが家来の謀反によって殺されたことも、すべて元をたどればヨアシュが主を捨てて主から離れたから。そこにすべての原因がある。この世に理不尽なことがあふれ、そこで人が苦しむのはなぜか。人が主から離れたから。

では二つ目の視点。神の側はどうなのでしょう。神は何もしないというのでしょうか。あるい

は、ただ上から眺めているだけなのでしょう。いいえ、その反対です。人と人との憎みあい、正しい者が理不尽な理由で殺されていくこの世界をご覧になり、神はじっとしてられない。それで、この世に人となって来てくださり、私たちが罪を悔いて主のもとに立ち返るようと、ご自分のからだを十字架で献げていただきました。

イエスは言われました。「まことに、おまえたちに言う。これららの報いはすべて、この時代の上に降りかかる。」悔い改めずに、預言者の警告を聞かず主から離れたままにいるなら、その報いを受けなければなりません。ハザエルがユダの国を襲って来たのはそのためです。人はつらいところを通らなければ、目が覚めない。

しかし、もし罪を悔いて主に立ち返るならどうなるか。私たちが犯した罪に対する報いは、主ご自身が受けとめてくださる。だから安心して、私の所へ来なさい。もしあなたがこの悲惨な世の中を少しでも良い方向に変えたいと願っているのなら、まずあなたが主に立ち返りなさい。

そんなことで何が変わるのかと疑問に思うでしょうか。聖書にこうあります。「一人の罪人が悔い改めるなら、悔い改める必要のない九十九人の正しい人のためよりも、大きな喜びが天にあるのです。」（ルカの福音書15章7節）天にそれほどの喜びが起こるのならば、地上ではどうなるか。先ほど私たちは主の祈りで祈りました。「みこころが天で行われるように地でも行われますように。」人が悔い改めて主に立ち返るなら、この悲しみに満ちた世界に喜びが広がっていく。もはや涙はすっかりと拭い去られる。それが主のみこころなのだと言ってください。